

個人的救いと段階的啓示

第一ペテロ 1 章 8-12 節

ロバート・D・ルギンビル博士 著

<https://ichthys.com/Pet28.htm>

の改訂訳：

(8) あなたがたは、この方をまだ一度も目にしたことがないが、それでもこの方を愛している。また、今この時、この方を見ることはできないが、それでもこの方を信じている。そのため、あなたがたは、やがて来る栄光に満ちた未来を示す、言葉では言い表せない喜びをもって喜んでいる。(9) その時、あなたがたは究極の賞を勝ち取ることになる。それは、あなたがたのいのちの救い(字義的には「救い」、すなわち個人的救い)であり、まさにあなたがたのこの信仰の目的であり、目標なのである。(第一ペテロ 1 章 8-9 節)

「あなたがたの魂の救い」：長年にわたる(そして誤解を招く)慣例に従って、ほとんどの英語訳聖書(例えば、KJV 訳、RSV 訳、NASB 訳、NIV 訳)は、上で「あなたがたのいのちの救い」と訳した句を「あなたがたの魂の救い」と訳しています<訳註：日本語訳の新共同訳、口語訳、新改訳も「魂/たましい」>。この従来訳の主な問題は、それが長年にわたって存在してきた誤った神学的考え方を助長し、その結果、これらの言葉が実際に何を意味しているのかについて、読者に誤解を与えてしまうことです。まず、人間は神によって造られた存在として、物質的な部分(人間の体)と霊的な部分(人間の霊)から成る二つの部分を持つ存在です。¹ 私たちは一人ひとり、いのちが始まった瞬間からこのような存在であり、永遠にわたってこのような存在であり続けます。[創世記 2 章 7 節](#)で、神がアダムの体にいのち(すなわち霊)を吹き込まれた時、アダムは「生きた存在」、すなわち「生きた魂」となりました(ヘブル語では nephesh / נֶפֶשׁ [ネフェシュ]であり、これに相当するギリシヤ語は psyche / ψυχή [プシュケー]です。参照：[第一コリント 15 章 45 節](#)。そこでパウロは創世記 2 章 7 節を引用する際、ネフェシュを プシュケーと訳しています)。つまり、ネフェシュ/プシュケーという「魂」は、実際には生きている人間全体を指しています。それは、神ご自身が一人の人間を形造るために創造された、霊的な部分と物質的な部分とが一つになった存在です(一般的な

¹ 特に、L・S・チェイファー著『Systematic Theology (組織神学)』第 2 巻、162-199 頁を参照してください。

考え方とは異なり、聖書における「魂」とはこのようなものです)。ネフェシュ/プシュケーは、人間全体を指すのであって、人間全体とは別に存在する、人間を構成する一部分としての「魂」を意味するものでは決してありません。しかし、ラテン語およびローマ・カトリックの影響によって、ほとんどの人は「魂」という言葉を聞くと、そのようなものを思い浮かべます。しかし、ギリシヤ語とヘブル語の用法では、決してそのような意味ではありません。聖書で「魂」という言葉が用いられる時、内なる人を強調する場合があります(結局のところ、それこそが本当の意味での「私たち自身」だからです)が、しかし聖書は、ネフェシュ/プシュケーを人間の一部分だけ(それが非物質的な部分であれ、物質的な部分であれ、あるいはその両方の何らかの組み合わせであれ)を指す言葉として用いることは決してありません。そのような考えは、聖書以外の憶測や理論から生じたものであり、正統的なキリスト教神学には存在する余地のないものです。簡単に言えば、ネフェシュ/プシュケーとは「その人自身」であり、したがって、その人自身の「いのち」を意味します。² キリストへの信仰によって「救われる」のは、私たちの一部分ではなく、私たち自身の**全体**なのです(そしてこれは、まさに非常に「良い知らせ」なのです)。

第二に、上記の英語訳聖書で「救い」と訳されているギリシヤ語 *soteria* / $\sigma \omega \tau \eta \rho \iota \alpha$ (ソーテéria)は、間違った訳ではありませんが、特に ネフェシュ/プシュケーを「魂」と訳す場合には、誤解を招く可能性があります。「あなたがたの魂の救い」という表現は、英語を話す人々の心に、ここでもまた、聖書とはまったく異なるイメージを生じさせるからです。このことは、この表現を、修正された訳である「あなたがたのいのちの救い」と比較すれば明らかでしょう。私たち人間は、イエス・キリストに対してどのような態度を取るかによって、自分のいのちを「失う」か「得る」かするのです(参照：[マタイ 10 章 39 節](#))。

人が全世界を手に入れても、自分自身(*psyche* / $\psi \chi \eta$ [プシュケー])を失い、または損なうなら、何の益があるだろうか。([ルカ 9 章 25 節](#) / NIV 訳)

ここでペテロが教えている救いについての内容は、この主題を扱う聖書の他のすべての箇所と完全に一致しています。イエス・キリストへの信仰によって、私たちのいのちは、神から永遠に離れて過ごすという恐ろしい結末から「救い出されます」。私たちがより頼むイエスの犠牲によって、この地上での短いいのちは、救い主が私たちをご自分のもとへ召してくださる時から、祝福された永遠のいのちへと移っていきます。これが 9

² この原則についての詳しい説明と更なる資料については、[『サタンの反乱』第 3 部「人間の目的、創造と墮落」](#)、および[『聖書の基礎』第 3 部 A「人間論」\(Anthropology\)](#) <英文。未翻訳>を参照してください。

節で言われている「勝利」(死に対する勝利。参照:[第一コリント 15 章 54-57 節](#))であり、これがペテロの語っている、私たちすべてが目指す「究極の賞」です。すなわち、天の父の御前で、イエス・キリストにあつて永遠のいのち(参照:[ローマ 2 章 7 節](#))であり、そしてその反対の結末、すなわち私たちの主を拒むすべての者を待ち受ける第二の死から救い出されることです([黙示録 2 章 11 節](#), [20 章 6 節](#))。このようにペテロは、3 節から始まったこの段落の議論を、これらの節によってまとめています。そこでは、私たちの霊的な新生、すなわち、イエス・キリストに自らを委ねるすべての者に、この地上にいる間に永遠のいのちが与えられることが、私たちの主の再臨の時に起こる義人の復活において完全に実現するものとして述べられています。³ イエス・キリストへの信仰によって、私たちは皆、この「究極の賞」、すなわち「私たちのいのちが無事に救い出されること」に到達します。それは、キリストを拒んで「自分のいのちを失う」者たち(すなわち、死から救い出されず、かえって「第二の死」を迎える人たち:[黙示録 2 章 11 節](#), [20 章 6 節](#), [20 章 14 節](#), [21 章 8 節](#))とは対照的に、私たちが無事に天にたどり着き、キリストと共に永遠のいのちを始めることです。これこそまさに「私たちの信仰の目的であり、目標」です。すなわち、イエス・キリストにある永遠のいのちと、永遠の死という刑罰から救い出されることなのです。

([本シリーズ第 20 課](#)で学んだように) 私たちが愛する主イエスと共に永遠に享受するこの永遠のいのちは、復活の体をもって生きる、非常に現実的で実体のあるものであることを思い起こす必要があります。しかし、復活した者たちの間では、この地上での奉仕に対して受ける報いの程度には大きな違いがあります。⁴ したがって、私たちの主の再臨と、永遠のいのちのために復活して主のもとに集められることを待ち望むことは、涙と苦しみに満ちたこの世にあつて、私たちに信じられないほど大きな慰めを与えてくれるだけではありません。悪魔の妨害にもかかわらず、主に忠実に仕えたことによって受けるすばらしい報いを確信をもって待ち望むことも、私たちの「生ける望み」の正当かつ必要な一部なのです([ヘブル 11 章 6 節](#)。参照:[第一ペテロ 1 章 3 節](#))。絶えず霊的に成長し、御言葉の真理を信じてそれを実践し、私たち一人ひとりに与えられた霊的賜物と奉仕を通してその真理を他の人々に伝えていくことによってのみ、私たちは永遠の報いを最大限に受けることができると同時に、偽りの教えという罠を避ける

³ 霊的な新生と永遠のいのちという主題については、本シリーズ[#19「霊的な再生」](#)(Spiritual Rebirth)、および『Bible Basics』第 4B 部「救済論」(Soteriology)を参照してください。

⁴ 『来たる艱難期』第 6 部「最終の事柄」(Last Things)の 1.7 節「教会の裁きと報い」([The Judgment and Reward of the Church](#))を参照してください。

ことができます。この偽りの教えは、私たちの報いを損なうだけでなく、私たちの救いさえ危険にさらすおそれがあるのです。

最後に、完全な永遠の体、新しいエルサレムにおける住まい、永遠に続く報い、すべての兄弟姉妹との完全な交わり、そして何よりも大きな祝福である、私たちの愛する主イエスと御父の御前に永遠にいる喜びなど、そのすべてを含むこのすばらしい救いは、まさに勝ち取るに値する賞です。そして、原則としてすでに今、勝ち取っているこの賞は、守り続けるだけの十分な価値があります。そのためには、信仰をもって耐え続けることが必要です。なぜなら、信じる者、すなわち最後まで信仰をしっかりと保って耐え抜く者だけが救われるからです([マタイ 10 章 22 節](#), [24 章 13 節](#); [マルコ 13 章 13 節](#))。イエスが私たちに望んでおられるように、シオンへと続く大路を前進している者たちにとって、この地上で遭遇する試練、困難、苦しみ、テスト、患難は、私たちの信仰を鍛え、強くする働きをします。それらを経験している時には喜ぶ理由にはならないとしても、それらが無事に乗り越えた経験は、あの偉大な評価の日に主の御前で大いに喜ぶ理由となるでしょう([第一ペテロ 4 章 13 節](#); [黙示録 7 章 17 節](#); [21 章 4 節](#))。しかし、後戻りしている者たちや、この人生でクリスチャンに必ず降りかかる困難によって落胆し、主からますます遠ざかっていくことを許している者たちには、次第に弱くなった信仰が最後まで持ちこたえられなくなる危険があります。ですから、これらのことを主の目を通して見るように全力を尽くしましょう。主は私たちの味方であり、どのような困難が起ころうとも、私たちを無事に乗り越えさせてくださることを理解し、自分の目に何が見え、耳に何が聞こえ、感情が何を感じようとも、主を信頼するのです([ローマ 8 章 31 節](#))。このようにして、私たちの信仰は、この文脈で約束されている永遠のいのちに至る、私たちのいのちの救いへと成長していきます。しかし、あきらめてしまう者たちには、主から離れていくことによって、信仰を完全に失ってしまう危険があります([第一テモテ 1 章 19 節](#))。

(35) だから、あなたがたはこの確信を捨ててはならない。それには大きな報いが伴っている。(36) 神のみこころを行った後、約束されたものを勝ち取るために、あなたがたには耐え忍び続けることが必要である。(37) 「もうしばらくすれば、ほんのわずかな時を待てば、来るべき方は必ず来られる。遅れることはない。(38) わたしの義人は信仰によって生きる。しかし、もし退くなら、わたしの心はその者を喜ばない」([ハバクク 2 章 3-4 節](#))。(39) しかし、私たちは滅びに至る臆病な背教に属する者ではなく、[永遠の]いのちに至る信仰を持つ者である。
([ヘブル 10 章 35-39 節](#))

第一ペテロ 1 章 10-12 節の改訂訳：

(10) このあなたがたに与えられることになっていた救いについて預言した昔の預言者たちも、この恵みの賜物について熱心に調べ、探し求めました。(11) 彼らのうちにおられたキリストの御霊は、キリストの苦難と、その後に続く[救いの栄光をはじめとする]栄光について前もって証ししておられましたが、預言者たちは、その御霊が示しておられる時が、いつであり、どのような時であるのかを熱心に知ろうとしました。(12) そして、これらのことを預言する彼らが仕えていたのは、自分たち自身のためというよりも、あなたがたのためであることが、彼らに示されました。そして今、その同じことが、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。これらのことは、御使いたちでさえ、もっとよく見極めたいと願っていることなのです。

段階的啓示：これらの節は、一般に「段階的啓示」と呼ばれる教理を、聖書の中でも最も明確に表している箇所の一つです。段階的啓示とは、今日の信者が知ることでできる神の真理のすべてが、最初から常に知られていたわけではなく、また、聖書の中に記されていたとしても、当時はまだ理解できるものではなかったという事実を説明するものです。アダムとエバが知っていた神の真理は、おそらく今日の信者が知ることでできる真理よりもはるかに少なかったと言えるでしょう。もちろんそれは、信者が霊的成長の歩みに真剣に取り組み、聖書を読み、真理を正しく教える良い教師を求め、健全な教理を継続的に学び、聞いた真理を実際に信じ、それを日々のクリスチャン生活に適用し、さらに霊的に成熟した後には、自分に与えられた賜物を正しく用いて他の人々を助けるならば、という条件のもとでのことです。創世記 3 章 21 節で、神がアダムとエバのために皮の衣を作られたことから分かるように、人類が樂園を去ったその時から、すでに福音は示されていました。私たちの最初の両親のための衣を作るために必要であった動物の犠牲は、すべての罪のために死なれる私たちの主を象徴しており、律法が与えられる前も後も、十字架という実体が現れるまで、神が罪の問題を解決される方法を示す標準的な手段でした(このため、[創世記 3 章 21 節](#)はしばしば protoevangelium [プロトエヴァンゲリウム、「最初の福音宣言」]と呼ばれます)。当時の福音と現在の福音との根本的な違いは、十字架以前には、人類は「キリストの苦難と、その後に続く栄光」([第一ペテロ 1 章 11 節](#))について十分に理解しないまま、神の救いを将来のものとして待ち望んでいたという点です。すなわち、「ぼんやりと鏡に映るものを見るように」([第一コリント 13 章 12 節](#)/KJV 訳)見ていたのに対し、十字架以後の私たちは、「十字架につけられたイエス・キリスト」がはっきりと示されているのを見るのです([ガラテヤ 3 章 1 節](#)/NIV 訳)。しかし、どちらの場合も、神の救いを信じ、神に自

分を委ねるすべての者を神が罪から救い出してくださると信頼することが、福音に応答して救われることの本質でした。

(51) 見よ。私はあなたがたに一つの奥義を告げよう。私たちは皆、眠るわけではない。しかし、私たちは皆、変えられる。(52) 終わりのラッパが鳴るその時、一瞬のうちに、またたく間にである。ラッパが鳴ると、死者は朽ちない者によみがえり、私たちも(すなわち、その時まで生きている信者たちも)[その時、すなわち主が再臨される時に]変えられるのである。(第一コリント 15 章 51-52 節)

上のことが「奥義」と呼ばれているのは、この啓示がパウロに与えられる以前(参照: 第一テサロニケ 4 章 13-18 節)には、聖書は今日私たちが理解しているように、復活の段階や状況を区別していなかったからです。以前に明らかにされていたのは、死者がよみがえり、ある者は永遠のいのちへ、ある者はさばきへと向かうということだけでした。

地のちりの中に眠っている者の多くが目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥と永遠の[神からの]断絶に至る。(ダニエル 12 章 2 節)

しかし今では、神がこれらの事柄についての啓示を私たちに段階的に与えてくださった結果、私たちは義人の復活のすべての段階を理解しています。すなわち、①キリスト、②教会(すでに世を去った者と、キリストが再臨される時まで生きている者を含む)、③千年王国時代の信者たち、すなわち「花嫁の友」です。

(23) しかし、それぞれ定められた順序に従ってよみがえる。まず初穂であるキリスト、次にキリストの来臨(すなわち再臨)の時にキリストに属する者たち。(24) それから終わりが来る。その時、キリストはすべての支配、すべての権威、すべての力を滅ぼした後、御国を父なる神にお渡しになる。(25) キリストは、すべての敵をその足の下に置かれるまで支配しなければならない。(26) そして、最後に滅ぼされる敵は死である。(第一コリント 15 章 23-26 節)

しかし、注意していただきたいのは、真理そのものは常に同じであったということです。真理が変わったのではありません。変わったのは、神がその恵みによって、ご自身の真理を、今や私たちすべてに与えられた聖霊を通して神の民に段階的に啓示し、律法の影から、イエス・キリストの御顔に現された恵みの現実へと導く中で、来たるべきすばらしい事柄について、より多くの詳細を私たちに知らせてくださったということ

す。「これらのことは、御使いたちでさえ、もっとよく見極めたいと願っていることなのです」([ヨハネ 16 章 12-13 節](#); [第一コリント 2 章 12-16 節](#))。

(4) あなたがたは、これを読めば、キリストの奥義について私がどれほど深く理解しているかを知ることができる。(5) この奥義は、以前の時代には人々に知らされていなかったが、今は御霊によって、神の聖なる使徒たちと預言者たちに啓示された。(6) [その奥義とはこうである。]異邦人も今や福音、すなわち[キリストの勝利の]宣教を通して、キリスト・イエスにあって共同の相続人となり、同じ体に属し、[イスラエルへの救いの]約束に共にあずかる者となったのである。(7) 私は、神の力強い御力によって与えられた神の恵みの賜物により、この福音に仕える者とされた。(8) すべての聖徒の中で最も小さい私に、この恵みが与えられた。それは、異邦人に、キリストの測り知れない富を宣べ伝え、(9) 万物を創造された神のうちに、世々隠されていたこの奥義[すなわち異邦人が召し出されること]が、今どのように実現されつつあるのか(字義的には「その摂理」)を明らかにするためである。(10) **神はこうされた。**それは、ご自身の驚くほど奥深い知恵を、教会を通して、**天上の支配者たちと権威ある者たち**(すなわち御使いたち)に知らせるためであった。(11) これは、私たちの主キリスト・イエスにおいて実現された、神の永遠のご計画(すなわち歴史を通してのご計画)によるのである。([エペソ 3 章 4-11 節](#))

御使いたちの関心：

「あなたがたに言うが、同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも、天ではもっと大きな喜びがある。」([ルカ 15 章 7 節](#)/NKJV 訳)

「あなたがたに言うが、同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがある。」([ルカ 15 章 10 節](#)/NKJV 訳)

ここでの私たちの主の言葉は、私たちがこの地上を歩む霊的戦いが、天において細かく見守られていることを明らかにしています。御使いたちは、一つ一つの勝利に大きな関心を寄せているからです。それだけではありません。御使いたちは、私たち信者が霊的戦いを戦ううえで、助け支える者たちであるとも言われています。

「御使いたちは皆、救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために遣わされる奉仕の霊ではないか。」([ヘブル 1 章 14 節](#)/NKJV 訳)

これらの事柄については、すでに以前取り上げました。⁵ ここで私たちが注目するのは、私たちの周囲で繰り広げられている目に見えない戦いの個々の戦術的な出来事に対する御使いたちの関心や、その戦いへの関与ではありません。そうではなく、イエス・キリストの来臨とその犠牲によって完全な勝利をもたらした神のご計画全体に対して、御使いたちが抱いている驚きと深い関心です。

さらに、御使いたちが特に関心を寄せているとされているのは、「キリストの苦難と、その後に続く栄光」です。全世界の罪のために十字架で霊的な死を遂げられた私たちの主イエス・キリストの御業は、人間の歴史においても御使いの歴史においても、これまでに起こった出来事の中で最も重要な出来事です。十字架こそ、神のご計画全体の土台だからです。キリストがカルバリで一人の罪人の罪のために死なれた時、その最も小さな働きでさえ、人類と御使いたちの歴史全体で起こった他のあらゆる出来事をすべて合わせたものよりも、比較にならないほど大きな重要性和畏敬、そして驚きを持っています。

それゆえ、サタンは十字架以前には、その出来事を何としてでも阻止しようと全力を尽くしました。そして十字架以後は、その効力を少しでも弱めようと全力を尽くしています。また、御使いたちが、キリストの苦難によって罪の問題がどのように解決されるのかに強い関心を抱いていたように、今では、その最高の犠牲がもたらした結果、すなわち「その後に続く栄光」にも深い関心を抱いています。そして、この「栄光」に、私たちもまた、自分の十字架を負って主が望まれるように主に従う時にあずかるのです。私たちが「キリストの苦しみにあずかる」時([ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ペリピ 1 章 29-30 節](#), [3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#); [第一ペテロ 4 章 12-13 節](#)。参照:[マタイ 10 章 38 節](#), [16 章 24 節](#); [マルコ 8 章 34 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#), [14 章 27 節](#); [使徒行伝 5 章 41 節](#); [第二コリント 4 章 10-11 節](#); [ガラテヤ 6 章 17 節](#); [第一テサロニケ 1 章 6 節](#); [第二テサロニケ 1 章 4-5 節](#); [第二テモテ 3 章 12 節](#))、私たちは、救い主とその死という岩の上に据えられた神のご計画の完成にあずかるのです。

これは、選ばれた御使いたちにとっても、墮落した御使いたちにとっても、大きな関心事です。墮落した御使いたちは、私たちがキリストに従うことを妨げようとし、そのた

⁵ この点については、本シリーズ第 22 課、および[『サタンの反乱』第 1 部 I.2.d.「御使いたちはいくつかの重要な点で人間と似ている」](#)を参照してください。また、地上の出来事が、すでに世を去った信者たちによっても天から見守られている可能性については、[『来たる艱難期』第 2 部 B.「天の海」\(The Heavenly Sea\)](#)の項を参照してください。

めに私たちを苦しめる機会を常にうかがっています。一方、選ばれた御使いたちは、キリストの犠牲の力と、聖霊を受けた信者たちが主のために力強く前進していることに深い関心を寄せ、許されている範囲であらゆる方法を用いて私たちを助けています。

神の御言葉が与えてくれるこの祝福された洞察から、私たちは次のことを学ぶべきです。私たちは、この世で孤立した一人の人間として、それぞれが黙々と歩んでいるわけではありません。私たち信者は皆、キリストの体の一部であり、その体は、悪魔とその軍勢からあらゆる場面で攻撃を受けています。しかし同時に、その戦いにおいて、聖なる御使いたちが最もふさわしい方法で私たちを助けてくれています。私たちは、私たちを取り巻く目に見えない御使いたちの戦いの一部であるだけではありません。私たちは、花婿である私たちの愛する主であり救い主イエス・キリストを代表する花嫁として、その戦いの中心に置かれているのです。

「私はこう思う。神は、私たち使徒を、死刑を宣告された者のように、最も身分の低い者として人々の前に置かれた。私たちは、この世に対しても、御使いたちに対しても、人々に対しても、一つの見世物となったのである。」([第一コリント 4 章 9 節](#))

(1) こういうわけで、私たちもまた、このように大勢の証人たち[人々と御使いたち]に取り囲まれているのだから、あらゆる重荷、特にまとわりつく罪を捨てて、自分たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走ろう。(2) そして、私たちの信仰の創始者であり完成者であるイエスから目を離さないようにしよう。イエスは、ご自分の前に置かれていた喜びのゆえに、十字架の恥をものともせず耐え忍び、神の御座の右に着座された。(3) あなたがたは、罪人たちからこのような激しい反対を受けながらも耐え忍ばれた方のことをよく考えなさい。そうすれば、心が疲れ果てて力を失うことはない。([ヘブル 12 章 1-3 節](#))

神が救いのご計画を実行されることは、選ばれた御使いたちにとっても、墮落した御使いたちにとっても、大きな関心事です。なぜなら、人類全体の救い(すなわちキリストの御業)も、一人ひとりの救いも、神のあわれみ、恵み、善良さ、そして愛を証明するものであり、それによって神がサタンとその御使いたちをさばかれたことが、完全に正しいものであったことを示しているからです。

段階的に完成する救い： 信者はすでに救われています。それなのに、なぜペテロは 9 節で、私たちは主の再臨を待ち望み、その時に救い(字義的には「救い出し」)を経験すると述べているのでしょうか。また、なぜパウロは「恐れおののいて自分の救いを

達成しなさい」([ピリピ 2 章 12 節](#)/KJV 訳)と言っているのでしょうか。その答えは、私たちはすでに救われており(キリストにあって、立場の上で救われています)、また今も救われ続けている(信仰が絶えず攻撃されるこの世を通る中で守り救い出されています)一方で、私たちが望んでいるすべてのことは、まだ完全には実現していないということです。まだ見ていないものは、望みをもって待たなければなりません([ローマ 8 章 23-25 節](#)でパウロが述べているとおりです)。しかし、私たちの望みは、実現するかどうか分からない、はかない期待ではありません。それは、主が再臨の栄光の日に、私たちのために必ず成し遂げてくださることへの揺るぎない確信です。信者にとって、信仰とは、まだ見ていないものを現実のものとして確信することです([ヘブル 11 章 1 節](#))。そして、信仰をもって将来を待ち望むことが、キリスト者の希望であり、その希望は何よりもまず復活に向けられています。

(23) それだけではない。初穂として御霊を受けている私たち自身もまた、心の中でうめきながら、子とされることの完成、すなわち、私たちの体が贖われること(すなわち復活)を切に待ち望んでいる。(24) 私たちは、この希望によって救われたのである。([ローマ 8 章 23-24 節](#)前半)

いつも明確に述べられているわけではありませんが、キリスト者の「救いの希望」が最終的に実現するのは、復活の時です。その偉大な日に、私たちは、イエス・キリストを信じる者として今すでに与えられている栄光ある立場だけでなく、神が私たちに約束されたすべてのことを完全に受けることによって、死からいのちへと移されます。すなわち、永遠の体を受け、それに伴う報いを受け、愛する主の御前で、すべての兄弟姉妹と共に、新しいエルサレムにおける永遠の相続を受けるのです。

(8) しかし、昼に属する私たちは慎み深くあろうではないか。信仰と愛を胸当てとして着け、**救いの希望**をかぶるとして着けよう。(9) 神は私たちを御怒りに定められたのではなく、私たちの主イエス・キリストによって**救いを得る**ように定められたのである。([第一テサロニケ 5 章 8-9 節](#)/NKJV 訳)

私たちは、聖化について学んだ時(本[シリーズ第 8 課](#)、[第 13 課](#)、[第 19 課](#)参照)と同じことを、救いについても見ることができます。私たちは、イエス・キリストを信じた時に、キリストと一つに結ばれたことにより、御父から「聖なる者」と見なされるという意味で、立場の上ですでに聖なる者とされました。また、復活の時には、完全に新しい体を与えられ、永遠に罪を犯すことのできない者となるという意味で、永遠に完全に聖なる者とされます。しかしその一方で、私たちはこの地上においても、聖なる生活を送るよう召されています。すなわち、すでに与えられている聖なる者としての立場にふさわし

く、また復活の日に完成する聖化を待ち望みながら、主と共に聖く歩むよう、自分の歩みを整えていかなければならないのです。救いについても、これと同じことが言えます。私たちはキリストを信じる者として、すでに救われ、救い出されています。しかし、その最終的な救い、すなわち救いを完全に受けるのは、体の復活を経験し、永遠が始まるその日です。それゆえ私たちは、すでに受けており、キリストと一つに結ばれた者として日々経験している救いを喜び、それに信頼するだけでなく、やがて来る救いにも希望を置かなければなりません。同時に、「A」と「C」の間の重要なつながりが途中で断たれることのないよう、努めなければなりません。なぜなら、「B」、すなわちこの地上での人生は、私たちがキリストに自らを委ねた後も、かなり長く続くことがあるからです（もちろん、神のご計画全体から見れば、それも永遠と比べれば瞬きほどの短さにすぎません）。そして、最終的な救いを受けるのは、救われている者、すなわちキリストを信じる者だけからです。

だから、愛する者たちよ。あなたがたはいつも従順であったように、私が一緒にいた時だけでなく、今、離れている時にはなおさら、恐れおののいて自分の救いに取り組みなさい。[\(ピリピ 2 章 12 節\)](#)

自分の群れを深く愛する優れた聖書教師として、パウロはピリピの信者たちに「真理のすべて」を語っています。信者である限り、私たちの救いは絶対に確かなものです。……**信者**である限りは。しかし、「種まき」のたとえには、岩地に落ちた種という種類があります。その人は、自分が救われたことを喜び、確かに芽を出します。……しかし、それはしばらくの間だけです。その後、失望や圧迫によって、このような人の信仰は次第に衰えていき、ついには完全に失われてしまいます。

「岩地に落ちたものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れる人たちのことである。しかし、根がないので、しばらくは信じていても、試練の時になると離れてしまう。」[\(ルカ 8 章 13 節\)](#)/NASB 訳)

このような人たちは、信仰から離れた後は、もはや信者ではないので、もはや救われてはいません。救いとは、イエス・キリストに信仰を置くことから必然的に生じる結果です。しかし、信仰を失えば、救いもまた失われます。この事実は、パウロの心からの警告を受けたピリピの信者たちと同じように、私たちにも、この人生において最も重要なこととして、自分の救いに取り組むよう促すはずです。なぜなら、私たちが本当に霊的に前進し、御言葉とそれに対する信仰において成長し、主を愛する者たちに訪れる試練に失敗するのではなく、それを乗り越え、自分に与えられた霊的賜物をキリストの体への奉仕のために用いているなら、恐れるべきことは何一つないからです。危険なのは、

霊的な無関心のために主から離れてしまうおそれのある、無関心な者たちだけです。神は私たちが救われないようにしておられるのでは決してありません。そんなことは断じてありません。神は、御子を遣わし、その犠牲によって私たちが生きるために、御子が死なれるようにしてくださいました([ヨハネ 3 章 16 節](#))。神は、世をさばくためではなく、世を救うためにイエスを遣わされたのです。その結果、イエス・キリストを信じるすべての者は救われています。そして、その救いに不可欠な信仰を保ち続ける限り、あの偉大な日においても救われるのです。

自分たちのためではなく、あなたがたのために仕えていた：神のご計画や、主が私たち一人ひとりの人生と世界の歴史のあらゆる出来事を完全に結び合わせておられることには、驚くべきこと、畏敬の念を抱かせることが数多くあります。しかし、その中でも最も驚くべきことの一つは、悪魔の支配するこの世にあって、信者が霊的に成長し、その歩みを支えられるために必要な真理のすべてが、聖書の中に完全に備えられていることです。

(2) 主は私を緑の牧場に伏させ(すなわち、物質的な養いのために)、憩いの水のほとりに伴われる(すなわち、真理の水のほとりへ。[イザヤ 55 章 1 節](#); [ヨハネ 3 章 5 節](#); [黙示録 22 章 17 節](#))。(3) 主は私のたましいを生き返らせ(すなわち、肉体と霊のいのちを回復させ)、御名のゆえに私を義の道に導かれる。([詩篇 23 篇 2-3 節](#)/NKJV 訳)

神が真理を完全に備えてくださったことには、受肉、キリストの霊的な死、そして復活が実際に起こった後になって、十字架と、そこで私たちの罪を負われたお方が、初めから神のご計画の一部であったことを示すのに必要な情報が、聖書の中にちょうどふさわしく備えられていることも含まれています。実際には、イエス・キリストご自身こそが、そのご計画そのものなのです。昔の預言者たちが見ることのできなかつたもの、そして私たちが見ることのできるもの、それは肉となって来られたキリストです。そして、私たちは、愛する主がこの世に来られる何世紀も前に、預言者たちに書き記すよう与えられた預言の言葉によって、そのキリストをさらに明らかに見ることができます。

以前に書かれたことはすべて、私たちを教えるために書かれたのである。それは、聖書が与える忍耐と慰めによって、私たちが希望を持つためである。([ローマ 15 章 4 節](#))

律法全体の目的は、人間の罪と無力さを明らかにすることによって、人を救いへ導くことにあります([ローマ 3 章 20 節](#), [7 章 7 節](#); [ガラテヤ 3 章 24 節](#))。しかし、その律法

の中には、来たるべきキリストと、私たちのためのその犠牲を明確に指し示す影が含まれています。

その翌日、ヨハネはイエスが自分のほうへ来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」。(ヨハネ 1 章 29 節/NKJV 訳)

その方を信じる者はさばかれない。しかし、信じない者は、神のひとり子の御名(すなわち、そのお方ご自身)を信じなかったので、すでにさばかれている。(ヨハネ 3 章 18 節)

神から生まれた者はみな、世に打ち勝つ。そして、世に打ち勝った勝利、それが私たちの[キリストに対する]信仰である。(第一ヨハネ 5 章 4 節。参照:1 節)

福音：漸進(ぜんしん)的啓示(段階的啓示)の重要な側面の一つであり、[第一ペテロ 1 章 10-12 節](#)の文脈でペテロが特に強調しているのは、福音がどのように示されてきたかということです。福音は昔から変わることなく同じです。すなわち、罪の身代わりとなられた私たちの愛する主であり救い主イエス・キリストに信仰を置くことによって、罪、死、そして罪の宣告から救い出してくださる神を信頼することです。この手紙の受取人たちは、小アジアの諸教会に最初に福音を宣べ伝えた人々による、この真理の宣教を通して救われたことを、ペテロはここで思い起こさせています。この手紙には、豊かで深い聖書の真理が数多く含まれていることから分かるように、ペテロは主として「彼らが初めて信じた時」のことを語りながらも、「福音」という言葉を、聖書でしばしば用いられている意味、すなわち、イエス・キリストについての「良い知らせ」を成す聖書全体の真理という意味でも用いています。もちろん、そのすべてを知らなければ救われないというわけではありません。しかし、そのすべてが「教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益」なのです([第二テモテ 3 章 16 節](#)/NKJV 訳)。簡単に言えば、私たちは神の御言葉という種によって新しく生まれ、霊的な幼子として救われますが、その成長は幼子のままで終わるべきではありません。御言葉という乳によって養われながら、「キリストによって定められた成熟の基準にまで到達する」([エペソ 4 章 13 節](#))まで成長し続けるべきなのです。

福音の働き手：私たちの救いを実際にもたらしめてくださるお方が、私たちが初めてイエス・キリストを信じた時に、真理を私たちの心に現実のものとして理解させてくださる聖霊であるように、聖霊はまた、聖書全体を書かせたお方でもあります。さらに、聖霊は、私たちが聖書の他のすべての真理を聞き、それを信じようとする時、それを理解できるようにしてくださるお方でもあります。これは、不信者にはできないことです([第一コ](#)

[リント 2 章 13-14 節](#))。教会が、悪魔の支配するこの世にあって、悪しき者の激しい反対にもかかわらず、一人ひとり、また教会全体として、霊的な幼子から霊的成熟へと成長していくことは、まさに心に深く刻むべき奇跡であり、「御使いたちでさえ、深く知りたいと願っていること」なのです([第一ペテロ 1 章 12 節](#))。⁶

キリストの苦難：やがて現れる栄光はすべて、ただ一つの土台、すなわちイエス・キリスト、その完全なお方と、私たちのために苦しみを受けられたその完全な御業の上に築かれています([第一コリント 3 章 11 節](#))。イエスは、私たちの罪のため、そして全世界の罪のために死なれました。この真理こそ、私たちが信じるすべてのこと、私たちのすべての希望と期待の土台です。主が私たちのためにご自身をささげられたことの偉大さは、今の私たちには到底十分に理解することはできません。しかし、それが人類の歴史においても御使いの歴史においても、これまで起こった中で最も偉大な出来事であったことだけは分かります。それだけではありません。主がすべての罪の代価を負うために火の中へ入られたことは、私たちの想像をはるかに超える出来事です。その犠牲のほんのわずかな一部分でさえ理解を超えており、その価値は測ることができません。イエスがおられなければ、歴史そのものも存在せず、歴史に意味もありません。もし主が私たちのために苦しむことを望まれなかったなら、私たちは滅びていたでしょう。そして、その滅びがどれほど恐ろしいものかは、考えるだけでも身震いするほどです。神であられるにもかかわらず人となり、この世を完全に歩まれ、サタンの手先となった人間と御使いたちから激しい攻撃を受け、十字架の苦しみとその前後のあらゆる辱めを忍ばれました。これら一つ一つの犠牲は、それだけでも私たちを畏敬の念で震えさせるに十分です。しかし、そのどれ一つとして、主が私たちのために暗闇の中へ入り、炎の中から立ち上がられ([士師記 13 章 20 節](#))、焼かれても焼き尽くされることなく([出エジプト 3 章 2 節](#))、私たちのすべての罪のためになだめを成し遂げられるまで苦しまれたことには到底及びません。私たちは、自分の最も軽い罪に対する最も小さな罰でさえ受けるにふさわしくなく、また受けることもできず、正直に言えば、それを受けようとしませんでした。しかし、イエスはそれを私たちのために負ってくださいました。私たちを救い、ご自身の花嫁、すなわちキリストの教会として、ご自身のものとするためです。⁷

⁶ 『聖書の基礎』第 5 部「聖霊論——聖霊についての研究」(Pneumatology: the Study of the Holy Spirit)を参照してください。

⁷ 『聖書の基礎』第 4 部 A「イエス・キリストについての研究」(Christology) の II.5. 「キリストの霊的な死」を参照してください。

「喜ぼう。歡喜して神をほめたたえよう。小羊の婚宴の時が来て、その花嫁は用意ができたからである。」([黙示録 19 章 7 節](#)/NIV 訳)

結論：今、私たちに与えられているこれらの驚くべき真理は、主がどのような苦しみを私たちに許されるとしても、その中で私たちを慰めてくれます。そして、これらの真理を学び、信じ、それを実践することによって、私たちは、この世の一時的で過ぎ去っていくものではなく、永遠の報いと、私たちのために苦しみ、私たちに永遠のいのちを与えてくださった救い主から、ついに主の御顔を直接仰ぎ見る時に「よくやった」と言っているだけという確かな希望に目を向けながら、精神的にも靈的にも支えられて歩み続けることができるのです。